



「覚えてるか？
初めて会った時のこと」

「んっ…」

「いきなりキスされて…
俺一気に18号のこと
好きになっちまってさ」



「ぺちゃくちや
うるさいね…、
セックスくらい黙って
出来ないのかいっ」

「ス、スマンっ、
でもお前が言ったんだぞ
『夜だけはあんたに
主導権をくれてやる』って」





「あ、そうか！
待ちきれなかったんだな、
悪い、今気持ちよく
してやるからな！」

「そ、そんなこと
言ってな……！」

「確かここだったよな、
昨日見つけた
気持ちいいところ」

「バカ…いきなり…!!
あっ…んうう!!」



「はは、やっぱり
ここ弱いんだな」

「ううう…黙れっ」

「イキそうなんだろう？
イっていいぞ」

「…ううう…」





「18号の潮吹き
絶頂可愛かったぞ」

「ちょ、調子に
乗るなよタコ！
次はそう簡単には
イカないからな！」

「つまりもう一回して
ほしいってことか？」

「う……」



「う、うるさい…
黙れバ…ううう！」

「そういう分かれ
やすいところ好きだぞ」



「もう一回見せてくれよ、
18号の可愛いイキ顔」

「このバカっ…
バ…んうう…!!」



「イツ…クふう！」



「もっとイキたいだろ？
何回でもイカせて
やるからな！」

「うっくっく...
うっくっく...」

7
4
2

7
4
2

7
4
2





「はあああ♥」

ビーン

「あっ…♥」

ビーン

「んはっ♥」

ビーン

フチエ

フチエ

フチエ

事後。

「俺も初めは驚いたよ、
18号の体がこんなに
感度が良いなんてさ」

「バカ…相手が
あんただからだよう…」

「え？何か言った？」

「バカって言ったんだよ
このタコっ！」

人ロオ...



「ちょ…
クリリンそこは!!」

「前から気になってたんだ、
そろそろ変化を
つけてもいい頃だろ?」

「ふ、ふざけるな!
そんなところ……!」

「まあまあ、
物は試してこいぞで!」



「意外とハマる
かもしれないぞ」

「んうう!?
こんなの…
気持ち悪いだけ…っ」



「あ…ん…あぁっ」

どっ

どっ

「そ、そんなわけ
ないだろ…っ」

「お？意外と反応
良いじゃないか」

ズリ
ズリ



「分かってきたぞ、
入回のところが良いんだな？」

「バカ…
何勝手なこと…！」



「ほら、どつたっ」

「んうう……」

「当たりだ！
18号のことは俺が
一番分かってる！」



「これならお尻でも
イケそうだな」

「18号はホントに
分かりやすいな」

「誰が…
お尻でなんか…っ！」



「ほら、
イキそうだろ？」

「じゃあ何で
震えてるんだ？」

「……」

「ち……碰っ……」





「んひっ……!」

んひっ

んひっ

「あんたの前で…
お尻でイクなんて…」

「そんなに落ち込むなよ、
俺はお尻で感じる
18号も好きだぞ」

「な…!?
だ、黙れタコ！」



「アンの勘違い
だって言ってるだろ！」

「いいや、
最近のお前は俺に冷たい！
昨日だって夜逃げただろ！」

「あれは…
そういうつもりじゃ…」



「だ、だからって何で
アナルフィストなのさ!？」

「これが一番
お仕置になるだろ」

「バカ…
元々それが原因…」

「とにかく今日とはことん
アナルフィストだ!」





「ぐわっ...?!」

グッ
グッ
グッ

「フィストもお尻も
嫌いじゃないだろ？
なのになんで逃げるんだ？」

「うん……んんんんん」

「うん……んんんんん」

「うん……んんんんん」



逆なんだよこのタコ！
フィストもお尻も…あんたのことも好きすぎるから！

「……………」

このままじゃダメになっちまいそうで怖いんだよ！
こんなこと素直に言えるわけないだろ！



「どづいても
言わないつもりか？」

「…ならケツに
聞くまでだ」

「……」



「ほら、言わないと
動きが激しくなるぞ」

「う」

「う」

「3...2...1...」

「んっ...っ」

「ア
ホッ
ッ...」



「時間切れた!」

「おおお……!」

「おっおっ……!」

グ
ブ
グ
ブ



全部…あんたのせいだからねクリリンっ。
あんたがあたしをこんな体にしたんだ…！

「頼むよ18号、
正直に教えてくれっ」

グ
オッ
ッ

グ
オッ
ッ

「うっ…くっ…っ」

そんなに聞きたきや全部教えてやる…！
幻滅したって知らないからな！

「好きすぎるんだよ…!!
ケツもフィストも…
あんたも!」

「怖かったんだ…
このままじゃ
頭おかしくなりそうで…」

「18号…」

「責任取れよ……」

「二生あたしの
相手しろよっ」

「ああ、約束する！」

「ああ……もちろん」



だったら好きにしるバーカ!

「18号!」

「ああっ♡」

「あはっ♡」

「んはああ♡」

壊そうがイカそうがお前の勝手だ!



「イク…イクッ…
イクうう…!」

「安心しろ18号、
どんな姿見せても
お前も離さないから!」

「…う
う…う
う…」

グ
オ
ッ

グ
オ
ッ



「んぎひいい♡」

んぎひ

んぎひ





「ん...ん...っ」

ん

ん

ん
ん

「抜くぞ18号」

「んふうう……!」

グッ
ポッ

グッ
ポッ
ユル
ッ



怖がってたのがバカみたいじゃないか…。

「脱肛姿も
可愛いぞ18号」

「ああ…あはあ、
クリリン…♡」

こんなことならもっと早く素直になれば良かった♪





「さあ、さっさと
始めるよクリリン!」

「おい…
まだ前戯もしてな…」



「んっ…んうっ、
お前が悪いんだからな…!!」

「お前が私を…
こんな女に…!!」



「悪い、そうだったな、
お詫びに好きになだけ
チンポ味わってくれ」

「い、言われ
なくたって……!」



「もう…
止められないよ…!」

「イ…くっ、
イクら!」





「んふううう...」

んぐ

んぐ

「もう一回……
いいだろう……クリリン？」

「はは、もう既に
腰振ってるじゃないか」



「クリリンン…
早く突いとくれよお♥
これをつけたらいつぱい
してくれる約束だろお？」

「ああ、約束だ、ただし、
人語を喋っていいのは
ここまでだからな」



「ほら、
鳴いてみる！」

「ぶっ…ぶっ、
ぶひい♥」



「いいぞ18号、
今日のお前は
可愛いフタさんだ！」

「はっはっ…
ぶひ…、ぶひっ！」





「んうう...♥」

「さあイケー!」

ドッ

ドッ

グッ

「いいか18号、
次はお前も一緒に動くんだ」

「俺が突いたら
お前は腰を下ろす、
そうすれば
より深く刺さる」

「はっはっ (頷く)」





「あつ、
あはああ♥」

「今だ！
下ろせ！」

「ぶひっ…ぶひっ…
ぶひっ…ぶひっ…」

「いくぞー18号、
中に出すぞー!」

「ぶひっ♥
ぶひっ♥ぶひっ♥」





「ひいっ♡」

「ぶっ...♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「うーん…
調子に乗って
仕込みすぎたかな…」

「あ…あああ…♡」

「…まあ
可愛いからいいか」

